

◇登場人物

・男1／店員

・男2

・男3

とある喫茶店。

男1と男2が、向かい合って熱く語っている。

少し離れて、男3が座っている。

男1 例えばな、目の前に、お腹を空かせて今にも飢え死にそんな人がいるとする。で、その人は、世間で悪名高い犯罪者だとする。その人は、たまたまその場に居合わせたお前に助けを求めている。もちろん、お前とその犯罪者との間には何の関係性もない。そこで、お前はどうかする？ その人を助けるか？ パンの一切れでも譲ってあげるか？

男2 うーん・・・助ける、って言いたいけど・・・。

男1 助けることで、お前が世間から非難されることになるとしても？

男2 それは・・・うーん・・・。

男1 お前がいま食料を与えることで、その犯罪者は生き延びて、今後世界を巻き込むようなテロを企てるかもしれない。そうすると、お前はそのテロの手助けをしたことになる。

男2 そんな・・・。

男1 でも俺は、助けるべきだと思う。

男2 え？ 助けるのか？

男1 そうだ。助ければいいんだよ。可愛らしい赤ちゃんだろうが、凶悪な犯罪者だろうが、目の前で苦しんでいたら助けるんだ。自分自身のメリットだとか、世間体だとか、そういうのを気にしたら、誰かを救うことも幸せにすることも出来ないんだよ。

男2 でも、助けることで、傍に居る人、例えば奥さんとか、そういう人が不幸になってしまおうとしたら？

男1 だったら助けないと？

男2 そう考えるかもしれない。

男1 逆に聞くが、「助けない」という判断をすることで、奥さんは幸せになるのか？

男2 え？

男1 そもそも奥さんは、お前が「助けないこと」を望んでいるのか？

男2 それは・・・

男1 いいか？ 目の前で苦しむ人を助けるか否か、っていうのは、人間の根っここの部分を問われているんだ。つまり、それは、無償の愛の有無だ。でも「私の為にその人を助けないで」なんて言うヤツは、結局表面的な損得でしか動いていない。すべてに見返りを求めるんだよ。そういう女と生涯を共にするということの方が、お前にとっては不幸な選択だとも言える。

男2 ...たしかにそうかもしれない。

男1 そうだろ？ だから、助けるべきなんだよ。お前自身の根っこの部

分、つまり良心に手を当てて耳を当てて、その命じた通りに動くんだ。

男2 そうだな。結局俺は、自分のメリットばかり考えて、生きていた
ような気がするよ。

突然、男1の携帯電話がなりだす。

男1 すまん（と、席を立ち電話に出る。）

男2 おう。

男1、電話の相手からどこか急かされている様子。

男2、黙ってそれを見ている。

男1、電話を切り、席に戻る。

男1 悪い。急に会議が入って。すぐに会社に戻らなきゃならなくなった。

男2 そうなんだ。忙しいな。

男1 まあな。

男1、テーブルの上にあった冊子のようなモノを男2のほうに
寄せながら、

男1 こういう風なことを、この『日本エアロビクス教会』に毎週末集ま
って、会員同士で議論してるわけ。ちなみに協力の『協』じゃなくて、
『教える』のほうね。

男2（冊子を取り）へえ。

男1 如何に善く生きるか、善く生きるとは何か、つてことを、ずーっと
考えていくとき、最後は、エアロビに行き着くんだよ。

男2 エアロビね。

男1（荷物を整理しだす）世界中の人がエアロビをはじめたら、戦争なん
てすぐになくなると思うんだけどな。

男1、踊りだそうとする。

男2 ちょっと！

男1 ああ、すまん（腰を下ろす）

男2 でも、エアロビなんて、やったことないな。

男1 じゃあさ、今度の会合、お前も来てみるか？

男2 え？ 俺が？ 会員でもないのに？

男1 大丈夫だよ。今度連絡する。

男2 え、でも・・・

男1 気にするなつて。気持ちいいぞー（小さく踊っている）

男1、鞆を手に立ち上がる。

男1 すまん。久しぶりなのに俺ばかり喋って。

男2 とんでもない。楽しかったよ。

男1 あ、そう。良かった。（腕時計を確認し）じゃあ、会社戻るわ。

男2 おう。

男1、歩き出そうとするが、急に立ち止まり、今度は反対方向に歩き出す。

男1（座っていた椅子に鞆を置き）その前にトイレ。

トイレに消える。

間

男2、目の前の冊子に目を通している。

間

急に、バタン、と大きな音が聞こえ、音の先を見ると男3がお腹を押さえながら倒れていて、苦しんでいる。

男2、あたふたしだす。

間

男1、トイレから出てきて、鞆を取る。

男1（腕時計を見て）やばい、これは間に合わない臭いが。

男2 え？（男1に気付く）

男1（テーブルの上の伝票を取り）出しとくから。また連絡するよ。

男2 え？ ああ。

男1、店を出て行こうとする。途中、倒れて苦しんでいる男3に気付くも、素通り。去っていく。

男2 嘘でしょ？

男2、あたふた。

間

男2、倒れている男3に近づく。

男2 大丈夫ですか？

男2、男3を抱きかかえ、必死に呼び掛けている。

男3、男2に何かを訴えているが、なかなか聞きとれない。

男2 どこか痛みますか？ 苦しいですか？

男3（もごもご）

男2 え？ なんですか？ ……とりあえず、水飲みましょう？

しばらくそのようなやり取りがある。

やっと聞こえた。

男3 ジュース……。

男2 え？

男3 ジュースが……。

男2 ジュース？

男3 ジュース飲みたい。

男2 ジュース……。

男3 ジュースを・・・。

男2 (周囲に訴えかける) 誰か! ジュース! 誰か!

間

男2、あたふた。

間

男2、テーブルの上の呼び出しボタンを押す。

インターホンの音が店内に響く。

店員の声 はい。

男2 (男3に) 大丈夫です。いまジュース来ますから。

店員、ルンルンとやってきて、

店員 お待たせいたしました。

男2 (店員に) ジュースを。

店員 ジュース。何ジュースで?

男2 なんでもいいよ!

店員 と言われましても。

男2 じゃあ・・・オレンジジュースで。

店員 かしこまりました。

突然、男3が男2の腕をガバツと掴む。

男2 なに!

男3 (囁くように) メニュー・・・。

男2 え?

男3 メニュー見せて。

男2 え? (店員に) ちょっと待ってくださいね。

男2、テーブルの上からメニューを取り、男3の顔の前で開いて見せる。

男3、じっくりと選んでいる。

間

男2 (男3に) 本当に苦しいの?

じっくり選んでいる男3。

男2 ねえ!

間

男3 オレンジジュース。

男2 なにそれ!

店員 かしこまりました。以上で?

男3 チョコレートパフェ。

男2 ちよつと!

店員 チョコレートパフェをお一つ。

男2 誰が食べるの？

男3 以上です。

店員 少々お待ちください。

店員、去っていく。

間

男3、立ち上がり椅子に座る。

その一連の様子をじっと見つめる男2。

間

男3、苦しみだす。

男2 ちよつと！

男3 ううう・・・。

男2 ・・大丈夫ですか？

男3 苦しい・・・痛い・・・。

男2 どこが痛いんです？

男3 全部。

男2 全部？ 救急車呼びましょう！ 救急車！

男3、男2の腕をガバツと掴み、激しく首を横に振る。

男2 なんで？

男3 私を殺すつもりか？

男2 何言ってるんですか！

男3 あなたにまで見捨てられると、私はもう生きていけない。

男2 別に見捨ててるわけじゃ。

男3 お願いだ。あなたは善き人だ。あなたは、私を助けてくれた。あなたは他の人とは違う。

男2 でも、苦しいなら病院に行った方が・・・。

男3 あなたまで、そんな・・・私を助けてくれたのは、あなたが初めて

だったんだ。私は毎日毎日、このお店に来て、今日と同じように苦しんでいたのに、助けてくれる人は誰もいなかった。

男2 ん？

男3 やつと出会えた。あなたを待っていたのです。

男2 ああ、それは、どういう・・・

店員、オレンジジュースの入ったグラスを2つ、トレイに載せて運んでくる。

店員 オレンジジュースになります。

テーブルの上にグラスを2つ置き、頭を下げ去っていくようにする。

男3、テーブルに置かれた瞬間、片方のジュースをストローで一気に啜る。

男2 (店員に) すいません！ 1つしか頼んでない・・・。

店員、男2を振り返り、すぐに去っていく。

男3、片方のジュースを既に飲み干している。

男2 まあいいや。

男3、もう一方のジュースも啜り、飲み干す。

男2、その様子を凝視。

男3 (苦しむふり) ううう……。

男2 大丈夫？

男3 ヒャクパー……。

男2 え？

男3 百パーのオレンジ、嫌い。

男2 は？

男3 (グラスを2つとも男2に差し出し) あげる。

男2 ちよつと。

男3 コーラが良い。

男2 おい！

男3 (突然苦しむ) ううう……。

男2 (困惑) ええ？

男3 (喉元を押さえ) うう……死ぬ……誰か、コーラ……。

男2 もう……。

男2、テーブルの上のスイッチを押す。

店員、威勢の良い返事とともに出てくる。

男2 (店員に) コーラを。

店員 おひとつ？

男3 二つ。

男2、男3を凝視。

店員 かしこまりました。

店員、頭を下げて去っていく。

男2 (男3に) もう大丈夫でしょ？

男3 あなたにはそう見えるのか？

男2 はい。

男3 そうか……。

間

男2 あの……。

男3 はい。

男2 ……あなたは、いったい何なんですか？

男3 わかりませんか？

男2 わかりません。

男3 そうですか。そうですね。

間

男2、静かに元の席に戻る。

店員、トレイにコーラ2つとチョコパフェ1つを載せて、男3のテーブルまで運んでくる。

店員 コーラと、チョコパフェになります。

男3、去ろうとする店員に、耳打ちをする。

店員、聞きながら男2の方をチラ見し、頷いている。

その後、店員はチョコパフェをトレイに戻し、男2のテーブルへと運ぶ。

その間に、男3は2つのグラスのストローを両方とも啜え、一気に啜っている。

店員 (男2に) お客様？

男2 (振り向く) はい？

店員 (チョコパフェをテーブルに置き) どうぞ。

男2 え？

店員 (男3の方を指し) あちらのお客様からです。

男2、男3の方を凝視。

男3、一心不乱にコーラを啜っている。

店員、頭を下げ去っていく。

男2、男3に軽く頭を下げる。

男2 (パフェを見つめ、小声で、少し微笑み、首を傾げ) なんなんだよ。

男2、パフェを食べ始める。

男3、飲み終えて、静かに店を出て行く。

間

店員、伝票を持って現れ、男2の肩を叩く。

男2 (振り向く) はい？

店員 (伝票を手渡し) あちらのお客様からです。

男3が居たテーブルを見るも、誰もいない。

男2 いない！

店員、頭を下げ去っていく。

間

男2、伝票を見る。キョロキョロします。

照明 C・O

了